

## 「水と風と生きものと 中村桂子・生命誌を紡ぐ」

中村桂子さんが震災後に  
思いを馳せる映像エッセイ

映画評論家 渡部 実



今回紹介する「水と風と生きものと 中村桂子・生命誌を紡ぐ」(2015年/藤原道夫監督)は科学者として活躍されている中村桂子さんが、東日本大震災についてご自身の研究領域である(生命誌)の立場から、自然とは、そして自然に生きる人間とは、といった思いを語りゆく、映像エッセイの趣きを持った作品である。

中村桂子さんはDNA(遺伝子)の不思議さに魅せられて科学者になった人である。そして従来からの生命科学という名称から、さらに生命誌という名称によってオサムシやチョウなどの身近な生きものの研究を通して、38億年にも及ぶ生命の壮大な物語絵巻を描き出す構想を抱いてきた。そこに実現されたのが生命誌研究館(1993年創設)という研究、展示の空間であった。

この映画は生命誌研究館の館長でもある中村さんが震災の被災地、東北の盛岡に赴く場面から始まる。震災の後、彼女は宮沢賢治を読み直し、とりわけ「セロ弾きのゴーシュ」に触発をうけ、盛岡・花巻への旅には『生命誌版 セロ弾きのゴーシュ』の舞台を自ら手掛ける目的があったのである。

映画全体の構成はおおよそ3つに分かれ、初めは『生命誌研究館』の誕生の動機とそこに働く研究者たちの紹介。中村さんのプロフィールも子ども時代からの写真の挿入も交えて、その生い立ちが語られる。学生時代の恩師との出会い。それより彼女は多くの人との出会いを大切にするようになったという。この映画では、今まで“生命誌研究の中村桂子”といった印象しか浮かばなかった彼女の肉声と表情が全編にわたって見られることで、彼女のパーソナリティを無理なく自然に伝えている。そこが、この映画

の第一の魅力であろう。

次には、中村さんがその自然観への思いを同じくする建築家の伊東豊雄氏。民俗学者の赤坂憲雄氏。造形作家の新宮晋氏。探検家で医師の関野吉晴氏。絵本作家の末盛千枝子氏ら5名の人々との対話が見られる。一見して各々の分野が違うようにもみられるが、不思議にも中村さんとの会話は深刻さよりも興味を喚起させる好奇心に満ちている。会話の豊かさというものを久しぶりに堪能した。

そして中村さんが演出と朗読を担当する『生命誌版 セロ弾きのゴーシュ』の舞台が紹介される。簡潔な舞台に、原作者の世界と同化し得る表現者の気持ちはいかばかりであろう。

私はこの映画を観て、生命誌を研究される中村桂子さんと共に教育者としての中村桂子さんをいとも自然に感じてしまった。たしかに彼女は科学者として「3・11の東日本大震災のあと、科学者は何もできない」と自己批判をしている。

しかし、その一方、生命誌の世界に限りない希望と理想を抱き、その理想を未知の人々に語りかけて伝える彼女の姿は教育者のイメージがある。難しい理論や理屈を言うのではなく、直に人々と出会い、相手にとっても平易に分かりやすく科学を伝えるその姿には魅了された。「水と風と生きものと」は科学の伝道師、中村桂子さんの人と仕事と使命を描いた清々しいドキュメンタリー映画とも言えるのではないだろうか。

「水と風と生きものと」は9月より東京・ポレポレ東中野で公開。以後、大阪第七芸術劇場にて公開予定。お問い合わせは、生命誌研究館 TEL・072-681-9750まで。